国際交流委員会からのご報告

前国際交流委員会　委員長　**長谷川　智子**（福井大学）

本年５月19～21日にメキシコ・カンクンでNANDA International 2016国際学会が開催されました。学会事務局によると、約16カ国から260名程度の参加者があったそうです。

今回の学会ではStructure of the NANDA-I Taxonomy "Member Discussion"があり、NANDA-Iタキソノミーについて、以前から検討されている３つの案（提案１：現在のTaxonomy II（13領域）を継続、提案２：Taxonomy III by von Krogh, 2011を採用、提案３：Gordonの機能的健康パターンを採用）について参加者の意見交換と、最終決断の投票が行われました。投票結果は、提案1の得票がもっとも多かったため、今後もTaxonomy II（13領域）が継続して使用されることが概ね決定されました。また、新理事長が上鶴重美先生（看護ラボラトリー）に正式決定されると共に、表彰会では喜ばしいことに本学会の元理事・監事の藤村龍子先生が功労賞を受賞されました。研究発表では、約120のポスター・ディスカッションと、約20のオーラル・ディスカッションがあり、会場は熱気に包まれていました。

学会が開催されたホテルはメキシコ湾を一望できるリゾート地にあり、真っ青な海に囲まれた美しい場所でした。学会の合間には参加者はホテルのプールでのんびりしたり、ビーチで遊んだりと、学会以外でも有意義で楽しい時間を満喫した学会でした。

日本看護診断学会研究助成への応募をお待ちしています！

研究助成委員会　委員長　**長家　智子**（佐賀大学）

日本看護診断学会には、「研究助成制度」があります。これは、日本における看護診断研究をさらに発展させ看護の質の向上に寄与すると認められた研究に対して、日本看護診断学会が50万円を上限とし研究費を助成する制度です。申請手続きは、A4サイズの「研究助成申請書」「研究経費支出計画書」を各１枚記入して、日本看護診断学会事務局あてに送るだけです。

助成を受けた場合、研究成果を近々の看護診断学会学術大会で発表し、学会誌に投稿していただくことが必要になります。助成金の使用使途など決算報告も必須事項ですが、それは研究するうえで必要不可欠なことで特別なことではありません。

看護診断は、現時点で看護学が対象とする現象すべてを網羅しているものです。そのように考えると、臨床研究の多くが看護診断に関連しているということが言えます。あなたのその研究も、見方を変えれば「看護診断」に関連しているかもしれません。

2016年度の申請締め切りは11月25日（金）事務局必着となっております。皆様の応募をお待ちしております。来年は8月末が締め切りとなる予定です。今年には間に合わない方も、来年に向けて準備していただくとすれば、十分時間があります。

研究費が逼迫している昨今、潤沢な資金源を確保し、ゆったりした気持ちで頑張りませんか。興味のある方は、ホームページhttp://jsnd.umin.jp/をご覧ください。多数の皆様のご応募をお待ちしています。

論文を募集しています！

編集委員会　委員長　**大島　弓子**（豊橋創造大学）

編集委員会では、看護診断に関する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。特に、提出期日はありません。投稿された論文は、速やかに2名の査読者に論文査読をお願いし、早期掲載をめざしております。

論文の種別については、以下のように取り決めています。

「原　　著」：研究論文のうち、独創性が高く、新しい知見が論理的に示され、研究論文として形式が整っているもの
「総　　説」：特定のテーマについて、知見を多角的に概観または文献を展望し、総合的に概説したもの
「研究報告」：研究論文のうち、内容・論文形式において原著論文におよばないが、研究としての意義があり、発表の価値が認められるもの
「実践報告」：看護実践・教育の向上、発展に寄与し、発表の価値が認められるもの
「事例報告」：事例を通じて、看護実践・教育の向上、発展に寄与し、発表の価値が認められるもの
「資　　料」：看護診断に貢献する資料他

現在、特に編集委員会が募集しているのは、「実践報告」と「事例報告」の論文です。
看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入　会　の　ご　案　内

本学会は適切な看護を行うために看護診断に関する研究・開発・検証・普及並びに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に際しては、入会申込書が必要となります。ホームページより申込書をダウンロードしていただくか、封書にて「入会希望」と明記し82円切手を貼った返信用封筒を同封して事務局から入会申込書をお取り寄せください。

日本看護診断学会へのご入会のお申込み先▶日本看護診断学会事務局
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-15-11イマキイレビル　㈱グローバルエクスプレス・国際会議センター内
TEL：03-3352-6223　FAX：03-3352-5421　E-mail：jsnd@convention-axcess.com　URL:http://jsnd.umin.jp/

日本看護診断学会ニュースレター　第19号
発 行 日　2016年11月1日
編集委員／大島弓子、矢田真美子、佐々木真紀子、中嶋智子、曽田陽子、片山由加里
日本看護診断学会ニュースレター
再生紙を使用しています

理事長のあいさつ

江 川 隆 子（関西看護医療大学）

2期目の理事長に推薦いただき感謝いたします。学会設立22年目を迎え、変化の著しい社会情勢の中、学会をどのように舵取りすべきかを考えると身の引き締まる思いです。微力ですが、14人の理事の皆様と一緒にしっかりと学会の運営をするとともに会員の増加にも心血を注ぐ決意を新たにしています。

第22回の学術大会長（長家大会長）の基調講演で（NANDA-Iの上鶴理事長）NANDA-Iの名称が変わることや、看護師が治療できないような診断指標や関連因子を大々的に見直す計画があることが報告されました。本学会も前期の理事会からNANDA-Iの看護診断を推奨しつつも、日本に適応する「看護診断概念」の在り方について検討することを議論してきました。今期は、これらの検討も含め、先輩達の診断概念に関する研究（他学会の研究も含め）等を基盤にして、日本に適応する看護診断（または看護診断概念）の開発に向けての基盤づくりを考えています。そこで、第２回の理事会で、理事長及び副理事長を主催した一（仮称）看護診断開発プロジェクト一を立ち上げることを提案しました。第３回（12月）の理事会までにこのプロジェクトの趣旨や計画を提案して、議論していただくこととなりました。また、看護診断（または概念）の理解と積極的な普及活動の一環として、副理事長が主となり、看護診断に関する研修会を開催することになりました。今回は、12月18日に京都で、１月は東京で開催する計画です。研修の内容や講師については、ホームページ及び医学書院の広告に詳しく掲載します。会員・非会員の皆様の多数のご参加をお待ちしております。また、学会に関して、学術大会や研修、学会誌等に対しても皆様からの声やご意見をお待ちしています。

学会の発展は、会員の皆様のご参加やご支援なしでは成り立ちません。是非、これからもさらなる会員の皆様のご支援を心からお願い致します。

2016年度　日本看護診断学会　新役員の役割

●理事長	江　川　隆　子
●副理事長	黒　江　ゆり子
	黒　田　裕　子
●庶務担当理事	小　平　京　子
●会計担当理事	西　田　直　子
●用語検討委員会委員長	長谷川　智　子
委員	佐　藤　正　美
●編集委員会委員長	大　島　弓　子
●研究推進委員会委員長	奥　津　文　子
●研究助成選考委員会委員長	長　家　智　子
●広報委員会委員長	三　上　れ　つ
委員	上　野　栄　一
●国際交流委員会委員長	本　田　育　美
●規約委員会委員長	小　松　万喜子
●学術活動委員会委員長	任　　和　子
●監事	小　田　正　枝
	中　木　　高夫
●幹事	下　舞　紀美代
	吉　岡　さおり

日本看護診断学会20周年記念誌に関する訂正とお詫び
20周年記念誌プロジェクト

記念誌編集にあたり所属名に誤りがありましたので、お詫びし訂正いたします。
298頁　草刈淳子氏
神奈川県立保健福祉大学特任教授 → 獨協医科大学大学院看護学研究科教授

第23回 日本看護診断学会学術大会のご案内

大会テーマ　患者像をつかむ！ ～看護診断をケアに活かそう～

大会長　**任 和子**（京都大学大学院医学研究科）

日程：2017(平成29)年 7月15日(土)・16日(日)

会場：国立京都国際会館

第23回 日本看護診断学会学術大会を国立京都国際会館におきまして開催させていただくことになりました。

本学術大会のテーマを「患者像をつかむ！～看護診断をケアに活かそう～」とさせていただきました。医療技術の進歩や少子高齢化による社会構造の変化等に伴い、看護学に求められるニーズも刻一刻と変遷しています。社会保障・税一体改革による医療・介護機能再編、さらに都道府県では地域医療構想の策定が進んでいます。2018年度は診療報酬･介護報酬同時改定と第７次医療計画がスタートする年です。本大会が開催される2017年は、団塊の全世代が75歳以上になる2025年、さらにその先も見すえた医療・介護の将来像を現実のものとしてみんなで共有する年になるものと思います。

地域包括ケアシステムの実現へ向けて、病いとともに生きる人の療養生活を支援する専門職として、看護職は社会から大きな期待をもたれております。このような状況下だからこそ、あらためて、専門職としての看護において基本となることを、看護診断に関心をもって集まってくださる皆さんとともに考えたいと思い、テーマを構想しました。

特別講演として、第１日目には、村井俊哉氏(京都大学 精神医学教授)に、「再考：患者像に名前をつけること」としてご講演いただきます。村井先生は、精神医学における操作的診断基準である「DSM-Ⅴ」の翻訳をされ、関連の著書もございます。また、「精神医学を視る『方法』」、「精神医学の実在と虚構」など興味深く読みやすい著書も多数執筆されておられます。「診断名をつける」ことについてあらためて考えたいと思い、このようなタイトルでご依頼しましたところご快諾いただきました。

また、竹熊カツマタ麻子氏からは、日米での看護教員としての経験、さらには米国でのマグネット病院である急性期病院での管理職経験から、これからの時代の看護の機能と役割について、臨場感のあるお話をしていただけるものと思います。加えて、特別セッションとして、クリニカルナースリーダー(CNL)という米国での新しい役割についてもご紹介いただきます。実際に米国でCNLとしての活動経験のある角田みなみ氏にも来日いただけることとなりました。

教育講演は、Electric Health Record(EHR)推進のリーダーである京都大学医学部附属病院の黒田知宏先生に「ビッグデータ科学時代の看護情報の蓄積」という魅力的なタイトルでご講演いただきます。さらに、地域連携、クリニカルパス、アセスメントというキーワードで看護分野から鈴木千佳代氏(聖隷浜松病院)、村木泰子氏(日本地域統合人材育成機構)、伊東美佐江氏(川崎医療福祉大学)にご登壇いただきます。クリニカルパスについては、特別セッションも企画しております。シンポジウムでは、北村愛子氏(大阪府立大学)、桑田美代子氏(青梅慶友病院)、本田育美氏(名古屋大学)にご登壇いただき、西田直子氏(京都学園大学)・山田佐登美氏(川崎医療福祉大学)座長のもとで、変わりゆく医療現場の中で患者像をつかみ、伝え、共有することをみんなで考えたいと思います。さらに、特別企画として、江川隆子理事長が「臨床でよく使う看護診断」として講演されます。

このように、看護診断を中心にすえて、将来を展望する企画を準備しました。一般演題の募集は、2016年12月１日(木)～ 2017年２月15日(水)17：00を予定しております。事例セッション・交流セッションも同期間に募集しますので、こちらも皆さまからの企画を楽しみにしております。

会期を予定しております７月の京都は、中断・再興をかさねて京都の歴史とともに歩んできた祇園祭りの時期です。日中は大会で新しい知見に触れ、意見交換、夜は懇親会で舞妓の芸を堪能、その後に、鉾をみながら歩行者天国となる祇園祭り宵山をお楽しみください。大会翌日の17日(海の日)は、山鉾巡行がございます。世界一、人気のある観光都市・京都での開催ですので、早めにご予定ください。宿泊につきましては、大会ホームページからもお申し込みいただけます。国立京都国際会館は、京都駅から市営地下鉄烏丸線に乗っていただければ約20分で到着する便利な場所にあり、景観美しく、落ち着いて学び話し合える素晴らしい会場です。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

最後に、熊本地震で被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。

大会ホームページURL：http://www.aeplan.co.jp/jsnd2017/

第22回 日本看護診断学会学術大会に参加して

吉岡 さおり（京都府立医科大学）

2016年７月２日(土)・３日(日)に福岡国際会議場で開催された第22回日本看護診断学会学術大会に参加させていただきました。今大会の大会長を務められた長家智子先生は、20数年前の看護学生時代にお世話になった先生であり、開催を心待ちにしての参加となりました。活気あふれた金獅子太鼓で大会が幕開けし、長家大会長が佐賀大学のマスコットキャラクターのカッチー君と手をとりながらご登壇された時には、会場が一気に和やかで温かい雰囲気に包まれたことを記憶しています。

今大会のメインテーマは「質の高いケアにつなぐ看護診断」であり、看護の教育者、実践家、他職種など様々な立場から、質の高いケアの提供を追究するための多くの企画が盛り込まれていました。大会長講演では、診断することが目的なのではなく、「個別性」を担保するために、一人一人の対象者の問題や状況を特定したうえで、看護診断をケアの根拠とすること、根拠に基づく質の高いケアを提供し、成果を評価していくことの重要性を再確認することができました。

一般演題の口演では、座長を務めさせていただきました。私が担当させていただいたⅠ群では４題の発表があり、その内容は、新しい看護診断の開発に向けた概念分析、電子カルテに関する評価尺度の開発、既存の看護診断の関連因子の妥当性検証、特定領域における看護師のアセスメント能力に関する研究など、テーマも方法も多岐にわたっていました。これらの発表を通して、看護診断名そのものに関する研究テーマだけではなく、日々の実践や教育、管理の立場から、看護過程、看護に関わる現象に焦点を当てた研究発表の可能性を再認識することができ、一学会員としてこれからも努力し、貢献していきたいと考えました。

また、看護診断学会学術大会では毎年多くの交流セッションや事例セッションが企画されています。今大会では２つの交流セッションに参加しました。交流セッションⅤ「基礎から学ぶ論文の書き方Part５ 一査読をいかに乗り切るか！一」では、心が折れてしまいそうな査読結果に対し、いかに誠実に丁寧に答えていくかについて実際の例を挙げて説明していただきました。交流セッションⅩ「国際学会に参加しよう！ NANDA-I 国際学会@カンクンからの情報発信」では、国際学会発表までの道のりや手続き、学会でのトピックスについて具体的に情報提供していただきました。他にも特定の専門領域や現象など様々な切り口から実践的で、「かゆいところに手が届く」多彩な企画が準備されており大変魅力的でした。

最後になりましたが今大会の直前に熊本震災が発生しました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。大会の開催までにも様々な困難があったことが推測されますが、おかげさまで充実した２日間を過ごすことができました。ありがとうございました。

第22回 日本看護診断学会学術大会を終えて

第22回日本看護診断学会学術大会　大会長　**長家 智子**（佐賀大学）

22回日本看護診断学会学術大会を、メインテーマ「質の高いケアにつなぐ看護診断」として、2016年７月２日(土)～３日(日)に福岡国際会議場を貸し切って開催致しました。今回の開催に当たっては、４月に熊本震災が発生し、その時点で参加登録が止まってしまうという事態が発生しました。「この人数では学会としての形も成立しない」と開催そのものが危ぶまれる中、理事の先生方をはじめ学会員の皆様や各県の看護協会のご協力を得て、再度作成したチラシを配布しました。参加登録の締め切りを延ばしたこともあり、事前登録は598名まで伸びましたが、学術大会当日まで心配はつきませんでした。

大会当日は突然の雷雨などもありましたが、皆様が移動される時間には青空が広がり、当日登録が494名あり最終的に２日間合計で1,091名の参加者を得ることができました。佐賀大学公認ゆるキャラ「カッチーくん」と共に登壇し開会宣言で始まったのですが、参加者でほぼ埋まった客席を眺め「たくさんの方に来て頂き、学術大会として恥ずかしくない大会になった」と胸をなで下ろしたことを忘れません。

開会の辞に続き、金獅子太鼓の豪快な音と獅子舞で盛り上げ、大会長講演へと繋げました。大会長講演では、メインテーマにあわせ診断することが目的なのではなく「個別性」を担保するために、一人ひとり対象者の問題や状況を特定したうえで、看護診断をケアの根拠とすること、根拠に基づく質の高いケアを提供し成果を評価していくことの重要性を強調しました。

特別講演は、佐賀大学消化器内科教授藤本一眞教授の「胃癌は予防できる？　ピロリ菌と胃癌」についてユーモアあふれる講演から始まりました。NANDA-I理事長に就任された上鶴重美先生に「NANDA-I看護診断の開発と洗練」、２日目には臨床の立場から三原由起子先生に「チーム医療推進に活用できる看護記録」を講演いただきました。学術大会特別企画「新しい26の診断への理解を深めよう」をはじめ、大会長特別企画「熊本地震の支援に何が必要か？　私たちは今、何ができるか！」、シンポジウム、教育講演、学術大会企画事例セッション、交流セッション、一般演題を開催し、どの会場にもたくさんの方が参加され、盛会で終わることができました。また、熊本震災への募金にも多くの方がご協力いただき感謝します。

最後に、今後の課題と考える点を述べておきます。今回、演題登録が少なく学術集会としては寂しいものでした。日本看護診断学会学術集会は、学習の場として参加される方が多いという特徴はあります。しかし、学術集会は、日頃の研究成果を発表する場という役割が大きいと考えると課題が残ります。また、学会員の参加者は２割強と少なく、会員数から考えると今後いかに会員の参加を増やしていくかが課題ではないかと考えました。

第22回 日本看護診断学会学術大会に参加して

永井 扶佐子（埼玉医科大学総合医療センター）

第22回日本看護診断学会学術大会は、2016年７月２日(土)・３日(日)に福岡国際会議場で「質の高いケアにつなぐ看護診断」をメインテーマに開催された。

今回の第22回の大会長講演で長家智子先生は、質の高いケアにつなげるためには、看護診断段階で対象者の状態(人間の反応)を適切に表し、個別性をとらえ、それを計画につなげ、看護ケアを提供して、対象者をより理想の状態へと導くことが重要だと述べられた。既存の看護診断ラベルには個別性がない。対象者一人ひとりの看護診断に必要な要素を証拠となる情報で裏付け、個別性を明確にする必要があるとも述べられた。これらのことは、事例セッションⅡに参加して理解が深められた。「看護診断の正確度を高めるための臨床推理の進め方」(慢性呼吸不全の患者の活動／休息の領域に焦点をあてた事例検討から)では、４～５名でグループワークを行った。進め方は、情報の解釈、活動／休息領域において考えられる診断仮説をあげる、診断仮説の検証そして最終的な看護診断の発表であった。まず事例を読み、手がかり情報に印をつけ、診断仮説を２つ以上設定し、診断仮説の検証をした。グループメンバーは、所属施設が違うたまたま一緒になったにすぎないが、「看護診断の精度を高めたい」との思いで参加しているため、「ＮＡＮＤＡ-I看護診断－定義と分類」を開き、確認しながら活発に発言し検証していった。正しい診断に向けた臨床プロセスを楽しく学ぶことができた。私たち看護師は、専門職として自律して看護を提供している。精度の高い看護診断を看護ケアにつなげることは、対象者の利益につながり、看護の存在が認められることとなる。自部署の臨床現場で「質の高いケアにつなぐために看護診断」をどのように導き出し、看護師が責任をもって結果を出す看護介入していけば良いかの示唆を得ることができた。

特別講演ⅡのＮＡＮＤＡインターナショナル理事長上鶴重美先生の「NANDA－Ⅰ看護診断の開発と洗練」では、2017年秋までに起こることとして米国の大学に研究センターの設置Gordon Center for Nursing Knowledge Development(仮称)、診断開発委員会の作業は研究センターで行われる、看護診断の採択は研究センターに所属するエキスパートが決め、会員による投票で決める。そして学会名称の変更International Nursing Knowledge Association(INKA)が挙げられた。またＮＡＮＤＡはどう変わる？として、北米から始まり全世界に広がっている、組織を次世代に残せるのか？　診断開発委員会への期待増加と活動と限界(新しい診断名を決めるには５年かかる)、診断の審査と採択過程には致命的欠陥がある。そして教育・研究のニーズに対応できていないなど本年度のNANDA-Ⅰ学術大会での検討・決定事項そして新しい情報が示された。最後に上鶴理事長からまだまだ研究の余地はある、そして日本から提案してほしいと依頼があった。質問が多く活発な発言があり有意義な時間だった。以上が参加して得た概略である。